

寂寥



姑が亡くなって一ヶ月が経った。朝食後、夫は「今日は命日だから社会福祉協議会に寄付に行つてくる。」

と言つて町役場に出掛けた。

足音を忍ばせながら姑の

今は「きこ」といふと気づく夜半

一週間前の歌会の一首詠草に提出した歌である。

姑の部屋は日当たりのよい東南にありトイレにも食堂にも近かった。必然的に私たちが夜中にトイレに行くときは足音にも扉の開け締めにも気を使う。水道の栓をひねるとき、夜中に茶の間でテレビを見たときなど、もそつと音を殺していた。それはこの五年間に習性となつていた。

ハッとその気遣いの必要はないことに気づくといふこともなくなつたのは、この三三田のことである。

そしてその代わりに何ともいえない寂寥感が襲ってくる。それはどうやら夫も同じらしい。

姑は一般の母親のイメージからは全く異なつた存在であつた。素晴らしい美人であつたと若い頃の姑を知る人は異口同音に言つ。しかし姑は継母に相당한差別の仕打ちをされて育ち、夫の女性問題などもあつて、早くから素直な愛情表現の術を失つていたよつだ。

夫や三人の妹たちは、平凡な母親の愛情の温もりといったものに包まれることなく育つたらしい。それは最近になつても、お互いに甘え合つといった雰囲気醸しだすことが無かつた。西洋の貴族の家庭のよつなある種の緊張感が漂つていたとも言える。

姑は全くの寝たきりになつても、私たちに少しも憚ることは無かつた。甘えも遠慮も相手を思いやる気持ちあつてのことであるが、彼女はあくまでも自分を主張していた。

食事の味付けも「甘すぎる」「塩けがない」などと、その都度文句が多かつたし、好き嫌いも激しく

「美味しい」と言つても二度同じものを続けて出すと機嫌が悪かった。おむつの交換の時も

「足が痛いんですよ」

「何をするんですか」

と大声で抵抗するのは毎回のことであつた。その代わりとでも言おうか、何時間も一人にしておいても「淋しい」と呼ばれることはなかつた。毅然と言つてもよい面持ちで庭を眺めていた。

私の実母は八年前に亡くなつてゐる。それまで二年ほど入院を繰り返してゐた。仏教徒であることに徹してゐたこともあつて、極力他人に迷惑をかけるよう氣づかつてゐた。母からは「痛い」「苦しい」といった言葉を聞いたことは無かつた。母の一生は祖母の「世のために尽くせ」との言葉に忠実に努めた一生であつた。

母の晩年には、私たちは東京にいたので、何度諏訪の日赤病院を訪れたことだつたらう。弟妹たちもよく集まつた。一緒に住んでゐた末の妹は実に献身的な看護であつた。母の亡くなつた時こそ泣かなか

つたが、あとで筆筒の中にあつた着物や長襦袢が、長女の私のために仕立て直されてゐた事を知つた時は涙がこぼれた。母は自分の総桐の筆筒を私に送つてくれていたが、その中を満たそつとしてのことだつたらう。弟や妹たちの嫉妬を受けても仕方がないとも思つた。

生前から私は自分の背後に母を感じてゐたが、亡くなつてからは益々その感が強くなつてゐた。何かをやり終える度に写真の母に

「これでよかつた？」

と話しかけるのがいつか習慣になつた。優しく見守られてゐるのだという思いに、異郷の地にいても少しも寂しいとは思わなかつた。

それが姑がいなくなつてのこの寂寥、空虚の思いは一体何なのだろう。

結婚してから四十年の間、私は随分と思いがけない「仕打ち」を姑から受けて来た。それが長年の間に、私の気持ちを硬直させてゐたのだと思ふ。

私たちは家を新築したとき、一番よい部屋を姑に

用意したし、生活に不自由なよう気がつかつて来た。栄養や身の回りにも不足ないよう理性的に心掛けた。しかしそれは無条件の温かい愛情とは違ったものだったと思う。かといってそれは無理に醸しだせるものではないので、それが私の限界なのだろうし、そのために自分を責めようとは全く思わない。

夫は私とはまた一寸違っていると思う。何のかの言っても血の繋がった親子である。屈折した思いが素っ気ない態度になつて表れたとしても、お互いそれは分かり合つていたことに違いない。そして多分夫は、生前に母に十分愛情を表現して来なかつたことに、多少の後悔の思いがあるのではなからうかと思つた。

満中陰の法要（四十九日）も間近になつた。姑の魂は、私たちにじめじめした悲しい思いなどさせることなく、カラリと去つて行くことだろう。私たちの心にポツカリと穴を空けたことなど全然気にも留めないで……。そして私たちの方も、その穴を埋めるのにそんなに時間は掛からないよつな気がする。

姑も自分に忠実に、一つの生き方を生きたのだと
つくづく思うことである。

